

# 木山捷平の学校小説

## —木山捷平文学における教育観—

定金 恒次

倉敷芸術科学大学留学生別科

(2009年10月1日 受理)

### 1 はじめに

岡山県小田郡新山村山口(現笠岡市山口)出身の詩人・小説家木山捷平(1904~68・昭和37年度芸術選奨文部大臣賞受賞)には、学校教育現場での事象に取材した「学校小説」ともいうべき一連の作品群がある。「うけとり」(昭8)、「一昔」(昭9)、「石出城崎」(昭9)、「掌痕」(昭10)、「尋三の春」(昭10)、「修身の時間」(昭34)、「回転窓」(昭34)、「どんこ」(昭38)、「弁当」(昭39)などがそれである。これらの作品には彼独自の「教育観」ないしは「教育批判」の奔出したものが多い。

本論文ではこうした木山の「学校小説」を分析し、その中に秘められた作者特有の「教育観」や「教育批判」を明らかにするとともに、彼にとっての「理想的教育像」をも追求しようとしたものである。

なお、木山捷平は1923(大正12)年3月、姫路師範学校本科二部を卒業後、兵庫県出石郡弘道尋常高等小学校(2年)、同県飾磨郡荒川尋常高等小学校(1年)、同県同郡管生尋常高等小学校(1年)、東京府葛飾第二尋常高等小学校(2年)など都合6年ばかりの教職体験があるので学校現場の事情にも明るく、学校教育に対しても高い見識を持っていたといえるのである。

### 2 「うけとり」にみられる教育批判

「うけとり」は昭和8年5月「海豹」に発表した短編小説であり、木山にとっては処女作「出石」(のち補筆改題して「出石城崎」)に次ぐ第二作である。ちなみに木山は、創作集『抑制の日』(昭14)及び『<sup>よつかしの</sup>昔野』(昭15)にも同じ題名で収録しているが、創作集『耳学問』(昭32)に収録する際には「初恋」と改題している。また、没後は講談社版全集(全2巻・昭44)を初めすべての全集に「うけとり」と再改題して収録されている。

「うけとり」とは子どもに割り当てられた労働や仕事の基準量(morma)という意味であり、岡山県西部から広島県東部にかけての方言である。ある仕事の量を課してそれを引き受けさせるので「うけとり」という。

貧しい農家の息子高木岩助(小学校6年生)は、学校から帰宅すると両親から冬の燃料用の松の落葉集めを「うけとり」として命ぜられ、毎日山へ出かけていた。ある日山へ行

くと、ほのかな思いを寄せていた1学年下の女生徒佐々木セイも松葉集めをしている姿を見かける。その日二人は俄雨にわかあめにあい、雨やどりした榭かきの木の下で互いに体温と心の触れ合いを感じ、以来山行きが楽しくなる。二人は山での出会いを繰り返しているうち、その行動が友達のうわさにのぼり、二人の名前とあやしい行動が山腹の寺の白い土塀に落書きされる。二人はそれを消すことに努めた。ところがセイは消しているところを寺の住職に見られ、ひどくほめられる。やがて落書き事件とセイの善行は学校へ伝えられる。セイは全校朝会で校長から激賞されるが、岩助は書いた張本人とみなされるだけでなく、まるで山の中の秘事を全校生徒の面前にさらけ出されているような屈辱を味わう。以下校長訓話の原文――。

今朝は皆さんに少々残念なことをお話して、皆さんの近頃の行儀について、よく反省してもらいたいと思います。というのは近頃、皆さんの中には学校から帰って山行きをする者が大分あるようだが、その山行きの行き帰りに……。 (中略) この村のお寺に、つまらぬ落書きがあるということは、この学校の顔に落書きがあるということでもあります。つまりそれはこの学校の大きな面汚しなのであります。

そこで皆さん、私は、誰と誰々がそのような悪い行いをしたか、ちゃんと知ってはおりますが、……けれども……中にはそのような者とは反対に、立派な行いをしている者もこの中にはありません。小阪(部落名)の佐々木セイの如きは、そのつまらぬ落書を一生懸命になって消しているのを見た人があるのであります。――(セイの善事への褒言ほめごとが繰り返される。)――それにひきかえ、誰と誰々がそのような悪い落書きをしたかは、私は、ここでは言いません。銘々が胸に手を当てて考えれば分ることであるし、今日は調べもしませんが、この台の上から見ていると、悪いことはできんもので、そんな生徒の顔には、私がそんな悪いことをしました、落書は私が書きましたと、ちゃんと表れております。

このように校長は事件の真相を全く知らないにもかかわらず、いかにも熟知しているかのごとく装っているのである。うわさを信用し、事実関係を究明することなく、恣意的であやまった「見込判断」によって特定の子ども褒めちぎり、特定の子どもに無実の罪をおしきせようとしているのである。褒められた佐々木セイにしても、自らの行動(落書を消した動機)が自己中心的であっただけに、後ろめたさを感じて釈然としないであろう。まして冤罪をおしつけられた岩助にとっては悔しさに耐えきれない思いであろう。

こうした子どもの心を傷つけるような無神経で、いい加減な校長の姿勢、でたらめで滑稽千万な学校教育のあり方――正常さを失った教育のあり方に作者は強い批判のまなこを向けているのである。

校長の愚かしさに輪をかけたのが担任の土井先生である。(以下原文引用。ただし紙面節約のため会話部分等の改行はせず。以下同じ。)

その日の午後。岩助は受持の土井先生に居残りを命ぜられて、ひとり教室にのこさ

れていたのである。(中略) 彼は椅子に腰かけて腕を組んだ土井先生と向き合って立っていた。「強情な奴だな。お前は」「……………」「えっ?」「でも、ほんとに私は書きません」「書かん?」「はい、書きません」「そんなら誰が書いたんじゃ? 言ってみい」「それは知りません」「それ見い、自分で書いたから、誰が書いたか分からのじゃろう?」「でも本当に知らんのです」「何? あっさりと白状してしもうたら、どうじゃ、——そうしたら、すぐ家へ帰してやるんじゃが」

取調べは既に小半時間も続いていた。まだ年の若い土井先生は、はじめは彼の強情にひどく憤慨して、額に青筋さえたてて自白を強要した。が、だんだん草臥くたびれてきて、面倒くさくなって来たらしい。

「じゃ、まあそこへ立ってもう一度よう考えとれ。——早う家へ帰りたけりゃ、早うあっさり白状するがええ」と、教卓に向って成績物をしらべはじめた。

岩助は何もかも腑に落ちないことばかりであった。今朝の朝会で自分が顔をあかくしたことが、落書の嫌疑を受けるに至ろうとは夢にも思わなかった。もともと先生は寺の土塀にどんなことが書かれたのかも知らないに違いない。もしも、本当にその落書の真相を知ったら、直ぐに先生も合点が行くであろうに。(中略)

その時、「どうじゃ、高木、まだ家へ帰りとうないのかえ」土井先生が俯向いたまま先程とうって変ってやさしい態度で問いかけた。今まで忘れていた今日のうけとりのことが、ふと彼の胸にうかんで来た。「早う帰りたいです」彼ははっきり答えた。「帰りたじゃろう? なら正直に言うたら、すぐすむことじゃ。別に叱りもどうもせん。今後気をつけさえすりゃええことじゃ」「……………」「お前ひとりかどうかは知らんがやっぱしお前も書くのは書いたんじゃろう?」先生の口もとには微笑さえこぼれていた。「はい」と、岩助ははっきり答えた。答えてはとした。が、もう遅かった。先生は仕事の手をやめて、つと立上った。口元の微笑はさっと消えて、目じりがこめかみ蟬谷につり上っていた。「図太い野郎!」鋭い罵声が彼の身体いっぱいにおそいかかって、大きな掌がびしゃりと頬べたを打ちつけた。岩助はふらふらとよろめきながら、「すみません」「どうも、すみません」と繰り返しながら、ぺこぺこ頭を下げていた。——

このような、教師の誘導尋問や心理作戦による卑劣で巧妙な取り調べ、さらには体罰や脅迫じみた言動による自白の強要は、当時の学校現場ではしばしば行われていたことは事実であろう。あるいは作中の土井先生のように、正直に白状すれば叱らないと優しく言いながら、白状するとたちまち豹変してどなりつけたり暴力行為に及ぶ教師も少なくなかったであろう。そうしたことが教師としての信頼を失墜し、やがては学校不信、教育不信を招く大きな原因となることは疑う余地のないところである。そして何よりも教師たるものとして許せないのは、事件の真相や事実関係を究明することなく、学校という権力や単なる教師の恣意によって子どもに無実の罪をきせてしまうことである。岩助のように善良で純粋な生徒を犯人にでっちあげてしまうことである。作者は、教師のこのような人権

をも侵害するような不当な取り調べ方や非合理的な叱り方に義憤を感じていたに違いない。だからこそ清純な「初恋」をテーマとするこの作品にあえてこのようなプロットを展開させ、岩助を取り調べる場面を克明に描いて取り調べ方の卑劣性、叱り方の非合理性を非難し——ひいては学校教育のあり方そのものをも痛烈に批判しようとしていると考えてよいであろう。

さて、ようやくのことで帰宅を許された岩助は、平常より1時間半も遅く家へ帰る。太陽がよほど西に傾いていたが、彼は今日の「うけとり」を果たすため、急いで山行きの用意をして出かける。寺道の坂を登りながら、「罪のないものを残して擲<sup>なぐ</sup>ったりしやがって。今日のうけとりは済むかどうか分りゃせん。もしすまんなら、今夜は夕飯も食わして貰やせん」と思うとやり場のない憤怒と無念さが五体をはげしく逆流する。そして夢中で歩いて寺の裏にたどり着くと、寺の土塀の白壁には、自分とセイによって消された落書が条痕となって残っている。それを見ると岩助はわけもなく淋しさをひしひしと感じ、改めて今日一日受けた屈辱に唇をかみしめるのであった。

彼は立止って、何かないかとあたりを捜した。道のほとりに、誰が焚いたのか、焚火の跡が黒く残っていた。岩助は無意識にあたりを見廻した。誰も人影はなかった。彼はいきなり粗朶<sup>そだ</sup>の燃え残りを掴んで土塀の下につっ立った。何か書きたくて仕方がない衝動を覚えたのである。彼は、まず、大バカ バカヤロー と大書きした。そしてその隣に図太く、土井安太ノ バカヤロー と書き加えた。

しかし、これだけでは彼の腹立ちは納まらなかった。一瞬、何か素晴らしいことはないかと考えた。彼はふと土井先生とこの春新しく赴任して来たばかりの女教師とが、いつであったか唱教室のオルガンの影でひそひそと話をしていたのを思い起こした。彼は右の拳<sup>こぶし</sup>をぐっとさし上げた。土井安太ト 山川タネコ ショウカシツ ノ スミデ ……………シタ と一際筆勢<sup>ひときわ</sup>あらく書きなぐり、そのほとりにその図画を描き添えて、更に棕櫚<sup>しゅろ</sup>の毛のような荒い線を数十本放射した。それだけ書くと、幾らか胸がすつとして来たように思われた。彼は手に残った粗朶炭<sup>くさく</sup>を叢<sup>くさむら</sup>の中に投げ棄てて、もう一度あたりを見廻した。やはり誰の姿も見えなかった。岩助は地べたに置いていたうけとりの竹籠<sup>たけかご</sup>を手につかむと、一目散に——まるで一疋<sup>びき</sup>の野猪のように松林の中に駆け上がって行った。

このように、学校でなされた校長や土井先生の不条理な叱り方は、いたずらに岩助の憤怒と反感をかっただけでなく、かえって落書き行為を助長するという全くの逆効果を生ぜしめているのである。作品のストーリーをこのような皮肉な結果に導くことによって、作者は当時の学校現場の愚かな営みを揶揄<sup>やゆ</sup>しているのである。この小説は「教育」そのものに視点を当てて書かれたものではない。木山自身、創作集『耳学問』に「初恋」と改題して収録しているとおり、少年少女の清純な初恋の情を主題としたものである。——この意味では樋口一葉の「たけくらべ」や伊藤左千夫の「野菊の墓」にも比肩すべき名作である

——そうした中にあえて学校教育のいびつな一断面を挿入することによって、当時の学校現場における不条理な生徒指導のあり方、ひいては教育そのもののあり方に大きな警鐘を鳴らしているといえるのである。それは取りも直さず、効果的な生徒指導、合理的な教育方法への、作者の切なる希求である。

### 3 「尋三の春」にみられる教育観

「尋三の春」は昭和10年8月、木山31歳のとき「早稲田文学」に発表した短編小説である。のち、創作集『昔野』（昭15）に収録する際は「小さな春」と改題し、『耳学問』（昭32）に収録する際「尋三の春」と元にもどし、以後すべての選集・全集に「尋三の春」として載録されている。貧農の息子須藤市太と担任教師大倉先生とのかかわりを中心とする尋常小学校3年生の一学期間の生活を描いたもので、木山初期のいわゆる田園文学の代表作であると同時に強烈な故郷賛歌でもある。

ちなみに、この作品は中学校の国語教科書（昭和50年東京書籍刊『新しい国語 二年』）に採録された。また、北京大学東方語言系日語教研室編集の日本語教科書（『日語』三下第一冊）にも採録され、広く中国の日本語日本文学専攻の学生にも親しまれている。筆者自身も1981（昭和56）年、この教科書でこの作品を黒龍江大学日本語学部で指導、学生たちにも好評であったことが忘れない。さらに中国では中国語に翻訳され、小学校5年生の国語（語文）教科書に収録（上海中小学課程教材改革委員会編、上海世紀出版集団・上海教材出版社刊）されるほどの人気を博している。

まず、この作品の主人公須藤市太は次のような劣等生として登場する。

——二年生から三年生になる時の私の通信簿は、唱歌と図画と体操と操行が乙で残りはみんな丙であった。父親が受持の先生に呼出されて、落第にしようかどうしようかと威かされた。親父は繰返し繰返し頭を下げた。それで私は三年生になれることになったのであるが、そのかわり、一日中納屋におし込められてひどい目にあわねばならなかった。日がもうとっぷり暮れてから、親父は扉の外に立って言ったものだ。

「市太め、これから親に恥をかかせないように、勉強するかせんか」私は中から哀願した。「する、する、ぜっぴするけん、出してお呉れ」（中略）兎も角も三年生になれた私は、新しい教科書を買って貰って登校した。——

一方、新卒で市太の担任となった大倉先生の着任時の様子は——

——詰襟服の毬栗頭の新しい先生は、号令台の上に飛び上がって挨拶をはじめた。「僕が只今紹介されました大倉です。苗字は大倉ですが、家には大きい倉も小さい倉もありはしません。小さな木小屋のような藁屋があるきりです。家が貧乏だったので、麦飯ばかり食って大きくなり、師範学校へ行っただんです。この間学校を出たばかりで、年は二十二で家内はありません。どうぞ皆さん仲よくして下さい」と、これだけ言うとおどりと頭を下げて号令台を飛び降りた。生徒達の間から一度にどつど

よめきがあった。私達はこんな新任の挨拶は初めてだったからである。生徒達は互いに顔を見合わせてびっくりし、ひそかにこの若い先生に親愛を感じた。――

このように大倉先生は、人の意表をつくほど素直で、庶民的で、親しみやすい教師として登場する。生徒からも限らない親愛の情をもって迎えられ、暗にその教育手腕が期待されているのである。事実、生徒たちも式後運動場の一隅に輪を描いて「今度の先生はきっと面白えど」「面白えけえど怒る時には怒るかも知れんど」「じゃけんど、怒る先生の方がええ先生じゃど」「罰掃除をさせるじゃろうか。わしゃ、罰掃除は嫌いじゃど」「わしゃ、<sup>ひいき</sup>鼻眞の方がもっと嫌いじゃ。今度の先生は鼻眞はせんと思うど」と、その指導ぶりに大きな期待を寄せているのである。

実はこうした権威ぶらない教師、庶民的で親愛感のある教師、それでいて生徒に迎合することなく、叱る時には叱る教師、そして何よりも鼻眞などの差別教育をしない教師こそが、作者木山にとっての理想の教師像なのである。

大倉先生は日々の授業でも肩のこらないリラックスした指導を展開する。――ある日の「修身」の時間。窓の外の桜の花びらが風に吹かれて本の上に落ちてくる。掌でそっと払いのけてもあとからあとから机上一面に舞い落ちてくる。窓際にいた須藤市太は勉強の邪魔になると思い、立ち上がって硝子窓を閉める。すると大倉先生は喋っていた話をやめて、「おい、おい、開けといても、かまやせんじゃないか。花見をしいしい勉強するのも面白えじゃないか」と笑いながら言う。――大倉先生にはこうした堅苦しい古い教育の殻を打ち破った斬新な授業によって、子どもたちを伸び伸びと育てようとする姿勢が明確にうかがえるのである。事実、これまで勉強の妨げになるような外界からの邪魔ものは断固排除し、よそ見もしないで勉強のみに熱中するように厳しく<sup>しご</sup>躰られてきた須藤市太は、こうした大倉先生のリラックスした雰囲気<sup>しづか</sup>で展開する授業に限りない魅力を感じ、勉強そのものにも大いなる興味をいだくようになる。

また大倉先生は合理的で筋の通った授業を展開する。「読方」の授業のとき、「皆んな、自分のことを自分で言う言葉にはどんなのがあるか、知つとるだけ考えて見い」という質問を発する。生徒たちは首を左右に振ったり、俯向いたりして考えると、われ先に挙手して答える。「はい、じぶんと言います」「はい、わたしと言います」「はい、わたくしと言います」「はい、わがはいと言います」「はい、われと言います」「はい、ほくと言います」――先生はそれらを一つ一つ白墨で大きく板書していく。そして「もう外にないかな」と尋ねるので、須藤市太は思いきって「はい、おらと言います」と答えると、教室中に嘲笑に似た爆笑が渦巻く。市太は自分のへまを感じ、恥ずかしさのあまり、俯向いていると追い打ちをかけるように、山本医院（村一番の分限者）の息子山本春美が「先生、おらと言うのは下品な言葉です。そんな言葉を使っちゃいけんと、申本先生（二年生のときの担任）が言われました」と抗議を申し込む。しかし大倉先生はその抗議を無視して、板書の続きに――際大きく「おら」と書き加える。すると春美はもう一度立ち上がって「先生！おらと言っ

てはいけんのじゃないのですか」と、いかにも自分の意見を大倉先生にまで強いようにするかのよう<sup>しつう</sup>に執拗に抗議する。ところが大倉先生は「使っちゃいかに悪いか、そんなことを今しらべとるのじゃない」と底力のある声で春美の発言を退ける。とたんに教室の中はしんと静まりかえって、今まで市太を嘲笑していた50人の級友はことごとく味方になったように思われ、市太はその豹変ぶりにかえって憎らしささえ感じるのである。作者木山捷平の分身、大倉先生はこうした春美の当を得ない抗議を毅然として退け、市太(劣等生)の当を得た発言はためらうことなく取りげる。何と筋の通った合理的な指導ではないか。

さらに大倉先生は、生徒に対して公明正大な態度で接する。須藤市太のクラスにいる村一番の分限者の息子山本春美は、「二年生の時までは級長をしていたが、三年生になってからは副級長にもして貰えず、平の生徒になっていた。多分大倉先生が鼯肩をしなかったためであろう。少なくとも私達生徒仲間ではそういう風評であった」のである。

けだし当時の学校では、地域の権力者や金持ちの子弟は親の威光によって先生から何かにつけて特別目をかけられ、不当に大きな恩恵に浴することが多かったようである。例えば勉強はさほどできず、リーダーシップは乏しくても級長・副級長などの役職を与えてもらったり、成績評定に手心を加えてもらったりすることができた。授業中にもたびたび指名にあずかったり、発言をことさら取り上げてもらったりすることも多かった。悪事を働いても見のがされたり、罰を手加減してもらえたりするようなこともあった。いわゆる「鼯肩」が横行していた。

しかも彼らは、例えば「級長の職権をかさにきて生徒の並び方が悪いと言って編上靴で(春美は学校中でただ一人靴をはいていた)私達の素足を蹴って歩く」ような横暴を働くこともあった。すでに述べたように、授業中に友だちの発言を封じたり、「自分の意見を大倉先生にまで強いようにするかのよう<sup>しつう</sup>な」独善的な態度をとったりすることもあって、級友からひどく嫌われた存在であった。大倉先生が着任したときも、生徒たちが「(今度の先生は)罰掃除をさせるじゃろうか。わしゃ、罰掃除は嫌いじゃど」「わしゃ、鼯肩の方がもっと嫌いじゃ。今度の先生は鼯肩はせんと思うど」とひたすら鼯肩のない教育を期待しているのは、実際の教育現場で鼯肩という差別教育がまかり通っていたことの証左である。こうした時代に、作者は差別教育をしない清廉な人柄の大倉先生をあえて登場させ、金権力や既成の秩序に追随しない、公平中正で、理にかなった教育を展開せしめているのである。

だからこそ大倉先生は、「村一番の分限者」の子弟である山本春美を特別扱いするような理不尽なことは決してしなかった。そればかりか、初めて「甲上」をもらって貼り出された市太の図画を、嫉妬した春美が破ったため、二人が大喧嘩をしたとき、大倉先生は二人を厳正公平な両成敗で処置する。

——その日の放課後、私と春美とは教員室の隅に佇た<sup>た</sup>されていた。上級の生徒が時々用事で室に入って来ては、横目でちらっと笑って出て行った。私の隣の春美は、私が

机の蓋で力まかせに殴りつけた後頭部の瘤<sup>こぶ</sup>を、わざと痛そうに大げさにさすっていた。自分の罪をいくらかでも軽くしようという魂胆であったろう。けれど私は何より大倉先生に叱られるそのことがつらい思いであった。先生は机にもたれて黙ったまま何か仕事をしていた。そんなに長い時間ではなかったのだが、私には非常に長く思われた。

やがて、先生は顎<sup>あご</sup>で二人を招いた。二人は並んで先生の机の前に立った。私は今にも目まいがしそうで、ぐっと二本の足に力を入れてふん張った。と先生は、「どうじゃ、早う帰りたいじゃろう？」と笑いながら言った。「はい」二人はうなずいた。「もう言うことはない。今日の一時間目に皆の前で話した通りじゃ」「……………」「覚えとるか？」「はい」「そんなら、あれ以上言うことはない。帰れ！」二人は呆気<sup>あっけ</sup>にとられてぺこんとお辞儀をすると、羅紗<sup>らしゃ</sup>の洋服くさい教員室をとび出した。教員室を出ると、春美はもう一度後頭部の瘤を大げさにさすりながら、「ちえッ」と舌打ちして、憎々しげに私をにらみつけた。

このような大倉先生の「喧嘩両成敗」の手腕もさることながら、その叱り方の直截簡明ぶりと爽快さにも注目すべきである。大倉先生は、くどくどと長時間にわたる陰湿な説教はいたずらに生徒の反感を招くだけで、何の効果もないことをよく承知しているのである。市太も春美も分かりきった小言を覚悟していただけに、あまりの簡潔さに「呆気にとられて」しまっているのである。

このように大倉先生は、家庭の貧富、勉強の出来・不出来、成績の良・不良にかかわらず、クラスの生徒に一貫して公明正大、公平無私、是々非々の態度で臨んでいる。喧嘩に対しても両成敗で臨み、当事者に納得のいくような叱り方をしている。こうした大倉先生の生徒指導に対する姿勢、さらには教育そのものに対する理念やその指導ぶりの中に、作者木山の求める格調高い合理的な教育観を見いだすことができるのである。

二年生のときまでは劣等生であった須藤市太は、大倉先生の担任になってからは「読方」の時間に自分の発言が取り上げられたり、自分の画いた図画が貼り出されたりするようになったため、俄然勉学への興味と意欲をかきたてられ、学校へも生き甲斐を感じるようになる。それに大倉先生の授業は屈託がなく、肩が張らないので、生き生きと楽しく通学する。そればかりか「学校から帰って妹二人の子守をしながらも、修身でならった二宮金次郎のように懐に本を入れて、野山をあるきながら時々出しては抜げて見たり」するほど勉学に意欲を燃やすようになる。

やがて一学期が終わり、もらった通信簿を見ると「あの時（春美と喧嘩をして叱られた時）以来気になっていた操行が、はっきり甲と読めるではないか。図画も甲である。他の学科はみんな乙で算術だけが丙であった。しかし、私のうれしさは並大抵ではなかった。ひょっとしたら大倉先生は私に最良をしたのではあるまいかとさえ疑う」ほどの好成績に自ら驚く。そして二学期になったら、「もっと立派な成績をとろうと決心」する。このように大倉先生は日々の教育実践の場で、勉学への意欲をいやが上にもかき立て、やればで



きるといふ自信を生徒に持たせているのである。

要するに大倉先生は既成の秩序や形式にとらわれず、終始のびのびと、しかも合理的な指導を展開してきた。生徒には勉学する意欲を起こさせ、個性や能力を最大限に伸ばす教育、また当を得た叱り方と中正公明な接し方をしてきた。特に村の有力者や富豪の子弟なるがゆえに最良をし、劣等児や貧困家庭の子どもなるがゆえに冷遇するような差別教育は絶対にしなかった。偏見や陋習を排し、合理的で厳とした教育的信念を持って指導に当たってきた。――実は作者はこうした「教育像」を追い求めているのである。いふなれば大倉先生こそ作者木山捷平の求める理想の教師像であり、大倉先生の具現した教育実践こそ作者自身の教育の理想像なのである。

かくしてすばらしい教育成果をあげつつあった大倉先生であるが、その功績は全く評価されないばかりか、二学期には次のような残酷な仕打ちにあう。

――長い夏休みが果てて九月が来た。九月一日、私達が校庭の桜の木影にうづくまて、二学期の始業式のはじまるのを待っていると、向うから山本春美が駆けて来て、したりげな顔で叫んだ。「みんな、知っとるか。大倉先生はこの学校を退かれるんだ」皆んなはびっくりして砂の上から腰を上げて思い思いに反問した。「ええ?」「ほんまか?」「嘘つけ!」しかし春美は唇を尖らせ、自信ありげに言うのであった。「嘘であるかい。嘘だと思ふんなら千円のカケをしよう。ゆんべ、うちのお父さんがお母さんに話したられたんだ」「ほんとか?」「ほんとじゃ。それ、僕等が笠岡へ遠足した時、海の向うの方に小さな島があったろうが。あそこへ島流しになるんじゃ」

けれども、まだ半信半疑でいる私達の耳に鐘が鳴りひびいて、二学期の始業式が運動場ではじまった。式が終わると、校長はあらためてもう一度号令台の上ののぼり、この度都合により大倉先生は北木島へ御転任になられることになったと宣告した。春美の言ったことが本当なのであった。――

わずか一学期間での突如とした転勤命令。しかし瀬戸内海の孤島の小学校への左遷である。それは「村一番の分限者」である山本医院の息子春美を叱ったり、最良をしなかったりしたための報復処置であることは明らかである。作者はこうしたプロットを展開させることによって、正常な教育がゆがめられている現実、村の有力者の不当な介入によって教員人事が左右される現実など、腐敗した教育界、さらには醜い社会に痛烈な批判を加えているのである。

ちなみに「松虫の詩」(昭和4年作)の中にも、ゆがめられた教育界への批判が秘められていることをかいま見ることができる。――松虫が語る言葉の中に、「学校の出来ない癖に通信簿は甲ばかりのボウヤがよろこんで……」がそれである。この「ボウヤ」も富豪の息子なるがゆえに、勉強はできなくても先生の最良によって成績は過大評価され、「甲」ばかりをもらっていると松虫は判断しているのである。こうした松虫の言葉を通して、作者は最良が横行する醜い教育界をユーモスに、しかも鋭く批判しているのである。

#### 4 「一昔」にみられる校長批判

「一昔」は昭和9年5月「作品」に発表された小説で、いわゆる「出石もの」を代表する詩情豊かな作品である。この作品は主人公「私」が10年前、「山陰但馬の出石という小さな城下町で小学校教師をしていた」ときの教え子矢川真武（3年生・愛称ボクちゃん）にまつわる思い出をつづったものである。

ボクちゃんは行儀はよくなかったが、純真で、手工と図画が図抜けてすぐれていたこと、絶えず花を持参しては教室美化に貢献していたこと、用便は学校のトイレを使わず1kmも離れた自宅まで帰っていたこと、姉がいて「私」に強い関心を寄せていることを語っていたこと、さらには氏神様の夜祭り時、姉弟同伴で宿直の「私」に茹栗<sup>ゆで</sup>を届けてくれることなどを懐しく思い出し、あれから10年を経た二人の現在の動静に想いを寄せる。そうした回想の中に挿入した、校長の、ボクちゃんへの対応ぶりに鋭い批判のまなこを看取することができる。

まず、朝会の時の私語の発生源がいつもボクちゃんであり、そのたびに「誰だ？ ものを言っとるのは！ 三年生の男生！」と校長の怒声が出る。「私」はたまらなくなり、教師根性を出して呼びつけて注意を与えると、ボクちゃんは悪びれもせず、「じゃちうて、校長さんの話は、毎日おなじことで、ちっとも面白いんですもの」と答える。担任教師たる「私」にもそれは至極当然のことと思えて、それ以上は叱ることができないのである。——こうしたボクちゃんの率直な発言と行動を通して、作者は校長の、子どもの心理を無視した、長時間にわたる味気ない訓話に批判のまなこを向けているのである。

またある日の放課後、二階の教室で掃除をしていたボクちゃんは、あやまって雑巾ばけつをひっくり返し、階下の校長室の机上に水がしたたり落ち書類はびしょ濡れになる。校長は自らボクちゃんを引っ張って来て怒鳴りつけ、教員室に立たせてなかなか帰そうとしない。そうした感情的な叱り方や陰険な体罰を加える校長に対して、担任の「私」は、「事によったら校長と一悶着起し兼ねない気配で、てぐすねひいていた」のである。こうした点に、作者の、過激な叱り方をする管理職、ひいては古い権力主義的な教育そのものに対する痛烈な批判がこめられている。つまり、長時間かけての体罰じみた野蛮な叱責は、いたずらに子どもからの反発をかうだけで、いささかの効果もないことを訴えようとしているのである。明らかに、もっと理にかなった叱り方、当を得た対応のしかたを工夫すべきではないかと、校長に猛省を促す気概を示しているのである。

しかもこの校長たるや、究極においてはボクちゃんとの駆け引きに負けるのである。小一時間もたったころ、ボクちゃんは校長に「まだ、帰んじやいけな<sup>い</sup>んですか？」と哀願する。校長は「駄目だと言ったら駄目だ！」と頑として聞き入れない。するとボクちゃんは「でも僕、うんこがしたいんです」と言う。ボクちゃんは教師達の爆笑裡に帰宅を許される。作者は、いつまでも解放しようとしな<sup>い</sup>校長を、こうしたボクちゃんの純朴な発言を挿入することによって揶揄するとともに、ボクちゃんに軍配をあげているのである。

## 5 「どんこ」にみられる教育体制批判

「どんこ」は昭和38年10月「小説新潮」に発表された小説で、戦時体制下における学校教育のあり方を告発した作品である。

国民精神作興に関する詔書が出た前後のころ、某群教育会の校長連中は、郡長や視学官のご機嫌取りのため、道徳向上策と称して小生学生に一日一善日誌を書かせていた。

五年生の灰野純太郎は下校時に、上級生の福本貞治にそそのかされて、「どんこ」(川魚)を捕ろうとする。それが発覚して担任の兵頭先生と教務主任の井頭先生から叱られる。そしてなぐられたあげく、巡査をしている父の職業まで引き合いに出され屈辱的な思いをする。純太郎の姉菊子は兵頭先生を訪ね、弟のどんこ捕りは実は井頭教務主任の受持生徒、福本貞治の陰謀であったことを先生から知らされる。つまり、福本が灰野のどんこ捕りをそそのかして実行させたあげく、「自分はどんこ捕りをしようとした灰野に忠告したのに、灰野は聞き入れなかった」とする虚偽の一日一善日誌を書いて出していたのである。

このように、子どもたちは先生から一日一善日誌を強制されるあまり、その日その日の善行に事欠くようになり、虚偽の日誌を書くばかりか、人を陥れたり級友に濡れ衣を着せたりして、いかにも自分が善行を働いたかのような日誌を書く仕儀となるのである。兵頭先生は「一日一善日誌」が「一日一嘘日誌」の様相を呈していることを嘆く。

主人公兵頭先生は、こうした上辺<sup>うわべ</sup>だけを装うようなゆがめられた教育体制、形骸化した不合理きわまる教育の在り方に警鐘をうち鳴らしているのである。この兵頭先生こそ作者の分身であり、作者の切なる思いを代弁しているものであることはいままでもない。

なお、警察官である、灰野菊子・純太郎の父は、病弱で犯罪捜査ができないため、菊子が代行して街頭に立つ。そしてある夜無灯火の自転車を発見、駐在所へ連行する。こともあろうに、犯人は井頭教務主任であったのだ。

以上、「うけとり」「尋三の春」「一昔」「どんこ」の4編の小説を分析し、作中に秘められた木山の教育批判と教育観を明らかにした。これを集約すると次のとおりである。

- (1) 既成の秩序や形式を打破し、合理的で斬新な授業を展開する教師。
- (2) 家庭の貧富、親の地位、勉強の出来・不出来にかかわらず、常に公平に子どもに接する教師。
- (3) 是々非々の態度で臨み、子どもの能力と個性を最大限に伸ばす教師。
- (4) 子どもたちに「やろう」という意欲と「やればできる」という自信を持たせる教師。
- (5) 体罰や陰湿な説教を排除し、合理的で直截簡明な叱り方をする教師。
- (6) 子どもの人格を無視して教育権力に迎合したり、上辺や外形だけをつくろうような教育を排除する教師。

こうした教師が木山捷平の求める理想の教師像であるといえる。それに何よりも木山は、地域の有力者が教育行政に介入したり、情実や金権力が幅をきかせる醜い教育界の現実を強く非難しているのである。

## School Novels of Shohei Kiyama —His Views on Education in His Literature—

Tsuneji SADAKANE

*Courses in Japan Studies for Students from Overseas,  
Kurashiki University of Science and the Arts,  
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*  
(Received October 1, 2009)

Shohei Kiyama (1904-68), a poet and novelist, who was awarded the 1962 Minister of Education's Art Encouragement Prize, was born in Yamaguchi, Niyama Village, Oda District (now Yamaguchi, Kasaoka City), Okayama Prefecture. He wrote a series of works called "school novels," the materials of which were gathered from schools, such as The Quata (1933), Ages (1934), Izushi · Kinasaki (1934), A Scar of Stab on Palm (1935), Spring of the Third Grade of Primary School (1935), Time of Moral Education (1959), Revolving Windows (1959), Donko (1963), and Box Lunches (1964). In these novels, his own "views on education" or "criticism on education" is filled.

This paper is presented to analyze Kiyama's "school novels" as mentioned above, to clarify his characteristic "views on education" and "criticism on education" which he put into his writings, and also to pursue his "images of ideal teachers."